

マタイによる福音書 28 章 20 節

あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～

はじめに

手作りの奨励集『頌栄のこころ』－第 30 集－をお届けします。

聖書には人類の知恵が詰まっています。頌栄短期大学は創立した 130 年前に祈りに始まり、そして神の言葉に向き合い、そして自分自身の心に向き合う時間、礼拝と共に歩んでまいりました。

これまではクリスチャンの先生や学生、そしてゲストの牧師先生などで礼拝奨励をしてまいりましたが、2018 年度後期からは専任教員全員、またキリスト教の洗礼は受けていないけれども、頌栄で出会った聖書からお話をしたいという学生の奨励が始まりました。頌栄が大切にしているその建学の精神を、みんなで大切にし、そして神を賛美することが出来ました。

ぜひ最後までゆっくりと読み、味わって頂ければ幸いです心を込めて語ってくださった先生方、先輩方や友の表情を思い浮かべつつ読んでみてください。それぞれの熱い思いが伝わってくることでしょう。ふと睡魔におそわれて過ごしたこと、つつい考え事やひそひそ話をしたこともあったけど、心に残り、自分と向き合うきっかけとなったことも多くあったのではないのでしょうか。自分に問いかけ、人生を見つめることが出来る言葉に出会ったことを、大切に歩んでください。



掲載は奨励日時

「平和の道具について」

竹内 伸宣

マタイによる福音書 5 章 8 節-10 節

「山上の垂訓」から 1200 年も時代を下った頃、イタリアのアッシジという長閑な町で、十字軍の戦闘で疲弊して帰郷した若者フランチェスコは、富裕な家族の財産を投げ捨てて布教の道に入りました。その名を借りた「平和の祈り」は、「神よ、わたしをあなたの平和の道具にしてください」で始まり、「誤りのあるところに真理を、絶望のあるところに希望を、悲しみのあるところに喜びを」「慰められるよりも慰めることを、理解されることよりも理解することを 愛されるよりも愛することを」と続きます。

マタイ福音書第 9 節には「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」という言葉があります。個人的な話になりますが、私の父は第二次世界大戦中、日本と中国との間で行われた戦争に従軍し、「神国の赤子（せきし）」即ち「神の国の子ども」ともてはやされつつ、「自分のいのちを献げて」友のため、国のために戦いました。父が 20 数年前に他界して後、その頃の従軍生活を丹念に記録した血糊の付いた従軍日記が残されているのを見つけて読んだ時、戦場で目の前で倒れていく戦友の死に対して、言葉にしようのない悲しみをあえて表現し追悼すると同時に、自分たちと同様、友を守るために懸命に攻撃を仕掛けてくる敵軍の兵士に対しても、「敵ながら立派に戦っている」ことを、相手の立場に立って語っている個所に目が留まりました。

左腕に砲弾の破片を浴びて傷ついて帰国し、貫通した穴を残したまま戦後の平和な生活を営み、私たちを育て、他界した父は、あの戦争を「勇壮」な「勇ましい」「頼もしい」「何者かに対する愛に満ちた」行為であると息子の私に語ることは一切しませんでしたし、戦争について語る言葉の裏に、「敵を憎む理由が見つからぬ、道理の立たぬ戦争は決してするな」と語りかけているように、子どもである私は感じていました。特定の国の特定の利益を代表する者の道具として、「鉄砲玉」として「犬死に」することは、決してあつてはならぬという深い反省を、表立って語ることはありませんでしたが、父はその深く感情を抉られる経験から感じていたのだと思います。

「平和の道具」となることで「真理」を実現する喜びを得、そこに「自由」を感じることができるためには、偽りの「平和」ではない、他国の生活者に対する「理解」や「慰め」、そして「愛」が必要になるのだと私は感じています。

(2019 年 5 月 8 日礼拝奨励要旨)

「感謝について」

渡邊 恵梨佳

テサロニケの信徒への手紙 5 章 16 節-18 節

5月のこの時期になると、「母の日」もあり日頃の感謝を表すことが多いことかと思ひます。私たちの当たり前が、一つひとつ感謝なのだということに気付かされます。

さて、頌栄短期大学では毎週2回チャペルで礼拝の時間があり、その時間はみんなが集まってお祈り等を行います。この共有できる時間や場所があることも感謝であることを感じて欲しいと思ひます。私も習慣や当たり前を感じてしまっていたが、私の友人の海外での活動や様子を聞くと、頌栄短期大学のチャペルでの礼拝の時間に、感謝しないといけないということに改めて感じさせられました。

私の大学時代の友人は、クリスチャンで聖書の言葉や福音を大事にしていました。大学卒業後は幼稚園教諭をしていましたが、最近では海外で教会学校の活動をしているとのことで友人の活動や現地の様子を紹介したいと思ひます。



メトロワールドチャイルドという活動は、1980年にビル・ウィルソン師によって創立され、世界12カ国で教会学校を行っています。主に、道端教会学校という1日に3~4ヶ所を黄色いトラックで子どもたちが通う学校周辺を周り、トラックをステージにしてそこに集まった子どもたちや保護者、その地域の方にイエス・キリストの愛を伝える活動を行っています。

道端教会学校の意義として、様々な理由で毎週教会に行くことが難しい子どもたちや家庭のために、教会に足を運ぶ垣根を越えて多くの人々を招待することができます。黄色いトラックが来ると、さっきまで歩道だった場所が道端教会へと変わり、沢山の人が集まり礼拝を守ることが出来るのです。



このように、海外では様々な理由で教会に行くことが難しく、みんなで集まったり礼拝を守ったりすることができにくい環境があることを、友人の活動の話を聞いて知ることができました。私たちは、頌栄短期大学のチャペルで毎週礼拝の時間を守ることができています。この礼拝の空間・時間・環境があることに感謝しなければならぬのだと気付かされました。人生の中の、または1日の中のほんの少しの時間であるかもしれませんが、みんなで集まって聖書の言葉に関して考えること共有することは貴重な時間であり、これからも大切にしていきたいと思えます。

(2019年5月14日礼拝奨励要旨)

「すくいのことば」

藤本 千草

マタイによる福音書5章3節-10節

令和になって15日目です。長い連休、母の日、そして災害による心痛める様々なニュースがあり、色々なことを考えさせられました。今日の聖書の箇所は、「山上の垂訓」のです。私はその中の8節「心きものは幸いなり」という言葉が特に好きです。辛いことがあったり、不運や不平等を感じたり、心も体も疲れ切っている時などにこの言葉にふれると、イライラしたり怒ったりする未熟な自分を反省し、無になって気持ちを切り替えることができます。小さなフレーズの言葉ですが、パワーを与えてくれる言葉です。

さて、母の日といえば、母。保育園で保育士は母のような役割も担っていると思います。

少し前に園児が車に巻き込まれて亡くなる辛い事故がありました。その折に開かれた記者会見。つらい思いの園長は記者会見においても記者たちの言葉により、さらにつらい思いをされました。その後 SNS 上では園長を擁護するコメントがたくさん送られたそうです。「言葉」は、人を傷つけたり、支えたり、すくったり、勇気づけたり、、、すごいパワーを持っていると改めて感じました。園にいる時は、保育士も園長も母のような存在だったのでしょ。あの涙に表れていたような気がします。どうやって子供たちを守るべきか、環境ということについて、考えさせられました。十分に配慮していても、不運にも事故にまきこまれたり、災害を被ったりすることは本当に辛いことです

マリア様も同じように、わが子のイエス様が張り付けてお亡くなりになった時、大変つらい思いをされたのでしょね。

保育士として、また、家庭の母として、それぞれに「子どもを安全に育てる」という責任を強く感じます。

私には二人の娘がいます。子育てを自分修行と思ってきました。子育てする中の色々な場面で自分の未熟さに気づかされるからです。長女が12歳、次女が9歳の時に一緒に渡米し、現地校で5年間アメリカで子育てを経験をしました。学校内に日本人が一人もいないという状況と、何を話しているのか全く分からず物事が進んでいく中で、不安が多かったのでしょう、帰宅するとよく泣いていました。学校に行きたくないと自分の髪を引っ張ったり、指を噛んだりもしました。泣きつづける子に無理やり学校に行かせていいのだろうかと自問自答する時もありました。私は、励まされる言葉や本を紹介したり、テレビや観劇を観たりスポーツをしたり、元気づけられるよう色々な工夫をしました。1日1日を声を掛け合いながら過ごしました。聖書の中の言葉に何度も助けられました。言葉、習慣、ルール、文化の違う中で子育てをするのは非常に大変です。現地の人々が常識とと思っていることが海外の人には驚きの出来事になったりもします。これからの日本は、海外労働者がふえ、家族で日本への移住もふえてくるでしょう。そうすると保育園や幼稚園にも私の子供のように言葉もわからない文化も違うという状況の子供達に通うようになっていきます。保育士として海外から来た子供達をどのように配慮していくか課題はたくさんあると思いますが、母のような気持ちで温かく見守ることに変わりないと思います。いつかそういう場面に会うことがあれば、この話を思い出してくれると嬉しいです。

「言葉の持ついろいろな力」を知っておくといいと思います。

(2019年5月15日礼拝奨励要旨)

「物語をつくる」

山中 早苗

ルカによる福音書1章1節-4節

5月末から、3月に卒業した保育科生や専攻科生が働く保育園、幼稚園等を訪問させていただく機会が何度かありました。保育中の卒業生の様子を見せていただくうちに、自然とそのクラスにいる子ども達の姿も目にとまります。その中で、ある幼稚園の3歳児クラスで出会った子どもの姿が強く印象に残りました。

保育が進む中、担任である卒業生は子ども達に絵本を読み始めました。クラスの子供達全員が担任保育者の周りに自然に集まって絵本の見える場所に座り、物語に耳を傾けています。そのなかで、一人の男の子が保育者にぴったりとくっつき、腰のあたりをつかんだ状態で座っていました。その子どもの手の動きや表情を見ていると、

「大好きな先生と片時も離れたくない」という強い思いが伝わってくる感じがしました。保育のなかの何気ない一場面でしたが、子ども達は保育者を抛り所にしながら安心できる自分の居場所を作っているということを改めて実感しました。そして、卒業生が子ども達と心の絆を結びながら保育を行っていることが分かり、それは私に勇気と励ましを与えてくれました。

今回の奨励では、ルカが記した「イエスの物語」の冒頭を選びました。ここに記された「物語」という言葉に触れた折、『人生をつくることは物語をつくること』、『生きることは自分の物語をつくること』という、臨床心理学者の河合隼雄先生がさまざまな著書で記している言葉が思い出されました。聖書に記された物語は、イエスの物語にはほかなりませんが、私達一人ひとりの中にも、物語は存在しています。

保育現場で再会した卒業生のなかには、保育の合間に少し話をする、「ホッとしたり涙を流す人もいました。この涙は、保育が嫌だという涙ではありません。それは、毎日子どもの成長や安全に対して責任を感じながら、緊張して子ども達にかかわっていることの現れなのだと思います。楽しいこと、そして、ちょっとしんどいなということ、いろいろなことを経験しながら、ここにいる皆さんも、学生から保育者へと続く、それぞれの物語をつくっていくのだと思います。

私自身、大学で保育を学んだものの、卒業後すぐに保育者になるという選択をしませんでした。保育とはあまり関係のない道草をして、現在はまたこうして皆さんと、保育の道を少しずつ歩いています。保育をしていても、そうでなくても、それは私が歩いてきた道であり、いろいろな道のなかから、自分が進む方向を選択して歩いていくところに、自分だけの物語ができていくのだらうと思います。頌栄で過ごす時間のなかで、皆さんにもいろいろな道を見つけ、自分の物語を紡いでいってほしいと心から願っています。

(2019年6月12日礼拝奨励要旨)

「受け入れる」

小寺 玲音

コリントの信徒への手紙一 9章 19節-23節

今日の奨励題は「受け入れる」としました。「受け入れる」「受容する」というのは私の研究テーマの1つでもあります。乳児保育の授業で、よく「受容的・応答的」という言葉を使っているのを覚えているでしょうか。乳児に対して「特定の大人が受容的にかかわること」これはなぜ大切なのでしょう？受容的なかわりは、乳児に安心感を与えます。人とのかわりの中で、

受容的なかわりと、受容的でないかわり、どちらが安心するのと言ったら、私は受容的なかわりの方が心地よく感じますし、受容的でないかわりは悲しく感じます。

今日の聖書の箇所は 19 節に「わたしは、だれに対しても自由なものです、すべての人の奴隷になりました。」とあり、22 節の終わりから 23 節に「すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」とあります。

先日、教会の礼拝で牧師先生が、「自ら喜んで人に仕える。自分の思い、欲望、感情、それも越えて相手に仕えることができる。それが本当の自由。つまり自分の欲望からも縛られない、それが自由なのです。」とおっしゃっていました。

日ごろ、自分の欲しいもの、食べたいもの、したいことなど、欲望に負けていることを実感する言葉でした。しかし、子どもに関しては、自ら喜んで子どもに仕えるし、自分の思い、欲望、感情、それも越えて子どもに仕えることが、私にとっては喜びでもあり、自由でもあると思っています。

そして、「仕える」という言葉を聞いて、頌栄保育学院 125 周年記念誌に書かれていた文章を思い出したので紹介します。

<保育は仕える業>

「保育は仕える業である。「仕える」とは、第一に学んだ知識・技術を保育の専門家として提供していく、用いていく業である。第二は存在を支える業である。幼児を、親・保護者を、大切な一人としてその尊厳性を護っていく業である。第三は幼児のまた親・保護者の魂に寄り添うことである。イエス・キリストがそうなさったように寄り添うことが求められる。」

相手に仕える時には、相手に寄り添い、受け入れることが大切だと思います。どうか、人に対して受容的なかわりを大切にしてください。そして、神様がいつも私たちのそばに寄り添ってくださっていること、大きな愛で守ってくださっていることを覚えていてください。

(2019 年 10 月 8 日礼拝奨励要旨)

「やさしさに溢れるように」

渡邊 恵梨佳

エフェソの信徒への手紙 4 章 32 節

奨励題の『やさしさに溢れるように』。

これは、JUJU さんが 2009 年にリリースした曲のタイトルです。この曲のタイトルや、歌詞の「あなたを包むすべてがやさしさに溢れるように・・・」という部分が印象的で、このようなことを思える人は素敵だな、こんな風に思える人になりたいなどと思わせるフレーズです。

「やさしさ」「優しい」について、私たちは「どんな人が好きですか？」と問われると上位に「優しい人」が挙がるのではないのでしょうか？多くの人が好み、なりたいと願う「優しい」人。私たちは人の優しさをきっとどこかで求めているのかもしれませんが。

そんな、「優しい」という漢字は、“にんべん”に“憂(うれい)”という字によって成り立っています。「憂い」とは「思うようにならならず辛い。苦しい。心配。嘆き。悲しみ。」という意味があります。つまり、「優しい」というのは、人が憂いを持ちながら生きているということ。単なる親切だけではなく、誰かをまたは目の前の人を見捨てることなく、自分の人生や誰かの人生の傷や失敗などから目を反らすことなく受け入れて生きることが「やさしさ」なのだと思います。

世の中には、形にならないものが沢山あり、そのなかのひとつに「やさしさ」もあるかと思います。嬉しいときに一緒に喜んでくれる。辛いときや不安なときに声をかけてくれる。または、何も聞かず黙って側にいてくれる。間違ったときに間違いを指摘してくれる、叱ってくれるなど、色々な「やさしさ」があると思います。私たちはこういった言葉がけや行動、存在など色々な形でやさしさを受け取っていますが、それにちゃんと気づけているのでしょうか？些細なことでも「やさしさ」に包まれているということを感じられるように意識したいものです。

さて、先週末は台風19号が各地に深い爪痕を残していきました。自然には抵抗できず、攻めることもできませんが、多くの被害にあわれた方々の周りにも、支援や助けなど様々な形で、「やさしさで溢れるように」と願います。普段から、私たちは色々な「やさしさ」に包まれています、このようなときだからこそ、互いに声を掛け合う等の「やさしさ」が身にしみるのではないかと思います。今回は、ラグビーで日本に滞在していたカナダ代表の選手も滞在先の岩手県でボランティア活動をしたことが新聞記事で取り上げられていました。これも「やさしさ」の一つであり、「やさしさ」は国境などもなく人間の本質、誰もが持っているものであるのではないかと考えさせられました。

最後に、私たち人間は、完璧ではなく誰かに支えられて生きています。普通に暮らしている人にも、失敗をして道を外してしまった人にも、全ての人に色々な形でそれぞれのもとに「やさしさで溢れるように」と私は願っています。また、一人でも多く「やさしさで溢れる」人や、またはそう願えるような人が増えれば良いなと思っています。

(2019年10月15日礼拝奨励要旨)

コリントの信徒への手紙Ⅱ 12章 9節-10節

10月は年齢を重ねていくなかでも大きな出来事と思えるいくつかのことが起こりました。もちろん自分で決断した出来事もありましたが、予期せぬことも起こりました。今日は古傷の腰を痛めるという予定外の出来事からお話をはじめたいと思います。

初めて腰の骨を折ったときは30歳になった頃です。当時は医師の診断で1か月間安静、病院では車いすが用意されました。仕事も1か月休職、今思えば贅沢な休暇ですが、当時は「歩く」ことも難しく、日々痛みに耐えるだけで精一杯、本を読む気力も、テレビを観る気力もなく、かなりの期間単に横になるという日々を送りました。健康がすぐれないときは、気持ちも後ろ向きになりがちです。職場にも家族にも、周りのさまざまな人に助けてもらっている自分が本当に役立たずで、迷惑をかけ通しに思えます。何もしていないことへの焦りもうまれて落ち込みもしました。

数年ぶりに腰を痛めたことであれこれふり返ってみると、身体のことだけでなく、自分が弱っている時に助けてくれる誰かがいてくれていたこと、周りの人の気づかいや優しさに助けられて生きていること、弱い自分であってよいと思えるようになったときを改めて思い出しました。身体的な弱さは周りに見えやすく、心のなかや見えな部分に抱えている弱さは見えません。

強いと思いつつ、あるいは強くなくてはいけないと思うことや、人に弱さを見せたくないと思いつつ、人に頼ってはいけないという思いを持つときはありませんか。弱さを抱えたありのままの自分を認められず、思考もあゆみも止まってしまうときです。それでも自分の弱さを知る経験を積み重ねながら、弱い自分を見つめることができるようになり、他の人の弱さに思いをよせるようになってきたように思います。

そして10月は身近な人との別れがありました。思い出すのはいつも穏やかな表情です。目の前でも、見ていないところでも私はさまざまな失敗をしていましたが、大小のドジも欠点も含めて、つねにあたたかく見守ってくれていたように思います。永遠の別れがこんなに突然とは思わず、感謝の気持ちをもっと伝えておけばよかった、もっと会いに行っておけばよかったという思いは残ります。弱い自分を遠くで見守り支えてくれた人との別れがあり、いくつかの選択もしなければなりません。心に迷いがあるとき、自分の弱さに悲しみを覚えるとき、自分の歩む道に迷うことがあります。そのようなとき、目の前に生じた状況から決断をしています。いくつかのたまさかを重ね合わせながら、偶然では片づかない必要な力や考えが示されてきたよう

に思います。自分の弱さを受け止めてくれることへの感謝を抱きながら歩いていきたいと思います。

(2019年11月5日礼拝奨励要旨)

「歌は祈り」

森瀬 智子

ルカによる福音書 1章 46節-55節 マリアの賛歌

今年も昨年度に引き続き『アヴェ・マリア』を2曲歌うことで奨励とさせていただきます。

Ave Maria (アヴェ・マリア) はピエトロ・マスカーニ (イタリア : Pietro Mascagni, 1863年~1945年、オペラ作曲家・指揮者) によって作曲された歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」の間奏曲ですので歌詞はなかったのですが、後にアヴェ・マリアの歌詞がつけられて現在に至っています。そのとても美しいメロディーは、声楽だけではなく、様々な楽器で演奏されています。歌詞がつけられてからは「マスカーニのアヴェ・マリア」と言われ、悲しみに囚われている”私の救済を求める歌”として有名になりました。詩はピエトロ・マッツォーニ (Pietro Mazzoni, 1833年~1907年) によるものです。

Ave Maria, madre Santa,
Sorreggi il piè del miser che
t'implora,
In sul cammin del rio dolor
E fede e speme gl'infondi in cor.

O pietosa, tu che soffristi tanto,
Vedi, ah! Vedi il mio penar.
Nelle crudeli ambasce d'un infinito
pianto, Deh! Non
m'abbandonar.

アヴェ・マリア、聖なる母よ、
あなたに懇願する哀れな人間の足を支えて下さい、
苦しむ罪悪の道の上に
そして信仰と希望を彼の心に呼び覚まして下さい。
おお慈悲深い人よ、あなたは大いに苦しみました。見て下さい、ああ！私の苦しみを見て下さい。とめど
ない涙のむごい苦悩の中に。お願いだから！私を見
捨てないで下さい。アヴェ・マリア！悲しみの餌食
の中に
私を放置しないで下さい、おお我が母よ、哀れみ
を！

もう1曲の『アヴェ・マリア』はルイーヂ・ルッツィ (イタリア : Luigi Luzzi, 1828年 1876年 この1曲が非常に有名な作曲家) イタリアで「アヴェ・マリア」というとこの曲が歌われるほど有名です。歌詞はラテン語のアヴェ・マリアがそのままイタリア語になっており、穏やかな中にも慈愛と激しさを感じる名曲です。

Ave Maria, piena di grazie il Signor
è con te
Tu sei benedetta fra le donne
e benedetto è il frutto del ventre tuo,
Gesú.
Maria! Maria!
Ave Maria, piena di grazie. Ave!
Sancta Maria, Madre di Dio,
prega per noi peccatori, peccatori,
adesso e nell'ora della nostra morte,
A men

アヴェ・マリア、恵みに満ちた方、主はあなたとともにおられます。
あなたは女のうちに祝福され、ご胎内の御子イエスも祝福されています。

マリア、マリア、
アヴェ・マリア、恵みに満ちた方、アヴェ、
神の母聖マリアわたしたち罪びとのために、お祈りください
今も、死を迎える時も
そうなりますように。

(2019年11月20日礼拝奨励要旨)

「一見捨てない」

原 寛

ルカによる福音書 15 章 3 節-7 節

ルカによる福音書 15 章は三つのたとえ話が書かれています。全ての人に向けられたイエスの教えです。中心は神の愛と喜びです。今日は、イエス様が語られた「迷い出た羊」のたとえ話です。このお話は、先日、秋季キリスト教研修会に於いて、講演された同志社大学木原先生と一緒にになってしまいましたが、今日話をする事に戸惑いはありましたが、同じ個所であることに喜びを感じました。

ある羊飼いが登場します。この羊飼いに 100 匹の羊が飼われています。羊飼いは主イエス様、羊は私たちのことでしょう。ところがあるときに、そのうちの一只がこの群れから、羊飼いの元から迷い出てしまうのです。いなくなった羊とは特に優れていた羊とも何とも書いていません。他の羊に比べてみて羊飼いかから特別扱いを受けていたわけでもなさそうです。100 匹の中の一匹でしかなかったのです。でも羊飼いは他の 99 匹の羊を山に残しておいても、この一匹を捜し出す。「見つけ出すまで捜し回らないだろうか。」と書かれています。これは必ず探し当てる。とのことでした。

私の思いでは、むしろこのようなことはあまりないことでしょう。99 匹の羊が残されてしまうと言うことは、その羊たちにも危険が迫ると言うことです。また羊飼いがいなくなったがゆえに、この 99 匹の羊もまたばらばらに迷い出てしまったらどうでしょうか。そちらの方がずっと損害が大きいはずで。冷静に考えたら、一匹の羊を捜

しに行くために 99 匹を山に残しておくやり方が良いのかどうか分からない。今みたいに携帯電話があれば、誰かを呼び助けを求め、一匹を探すか、探してもらうかを考えるでしょう。

ただこのたとえから、イエス様の教えが私たちの心に響いてくるのは、この羊飼いは、たった一匹の羊のことも心配で心配で、決して一匹でも自分の前からいなくなってしまうことが悲しくて寂しくて、この羊を捜しに行かずにはおれなかったということです。私たちはこの羊飼いの行いに、小さな者の存在をも尊いものとし、愛しぬいてくださる主イエス様の愛を知ることだと思います。

そのように考えたときに、この迷いでた一匹の羊の救いは、山に残った 99 匹の羊の救いにもつながることが分かります。迷い出た羊は特別ではなかった。ちっぽけな存在だった。でも羊飼いは見捨てなかった。大切な存在として愛しぬかれた。残された 99 匹の羊たちもこの羊飼いに飼われている羊なのです。

自分自身もちっぽけな存在であり、いつかこの自分が迷い出してしまうかもしれない。その時もこの羊飼いは、私を最後まで捜し続けてくださる。見捨てない、ここに私たちは大きなイエス様の愛を感じるのです。羊飼いのような方が、頌栄で学んでいる皆さんの身近におられると思います。

2011 年（平成 23 年）3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震発生後、この言葉をテレビで、聞いたことがないでしょうか。

—『命は、大切だ。』—『命を、大切に。』

—『そんなこと、何千何万回言われるより、』

—『あなたが大切だ。』—『誰かが、そう言ってくれたら、』

—『それだけで、生きていける。』—『明日のために、今始めよう。』

公共広告機構からのメッセージです。

たくさんの若者が心を打たれた言葉です。「あなたが大切なんです。」主イエス様はそのように私たちに声をかけて下さっています。

さて、11 月 23 日(土)～26 日(火)4 日間の日程で、日本を訪れたローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇が各地で述べられた言葉は、日本の社会にたくさんの課題を問われたと思います。26 日帰国前に、自身の出身母体である修道会の「イエズス会」が設立した上智大学を訪れ、大勢集まった学生に講話をされました。内容を新聞で読むと学生に対し「公正で人間的で、常に弱い者の味方になるように求めた。」と締めくくられていた。短い滞在で、日本の発展の陰には、人を慈しみ・互いに手を取り合う社会が崩壊しつつある事も感じられた滞在であったと感じました。

(2019 年 11 月 27 日礼拝奨励要旨)

「主の貧しさによって」

理事長 菅根 信彦

コリントの信徒への手紙二 8章9節

クリスマスに備える待降節第2主日を迎えました。私の勤めるいずみ幼稚園・石井幼稚園では日曜礼拝の保育が毎週行われていますが、今はカーテンで暗くした部屋にクランツのローソクが2本立ちました。幼稚園の園児たちは、今イエス様の降誕劇の練習に励んでいます。このローソクの火について、「遠い昔、ベツレヘムでヨセフさんとマリアさんが、泊まる宿もなく、寒く・寂しい馬小屋でイエス様が生まれたことは知っているのね。後の人が、馬小屋でのイエス様の誕生外が余りにもかわいそうだと思います、今度、ヨセフさんとマリアさんが訪れる時は、『我が家にお入りください』との思いをもって、外に見えるようにローソクを灯したんだよ」と伝えていきます。つまり、クランツのローソクは私たちの心にイエス様を迎えること、イエス様の愛と優しさを私たちの心に宿していくことだよと教えています。だから、クリスマスを迎える私たちは、困っている人のことを覚えて祈り、クリスマス献金箱にお小遣いの一部をささげようねと伝えていきます。この時期、子どもたちの心は聖誕劇の練習とともに優しくなっていくと思います。

貧しい人々の尊厳のために生涯を献げたマザー・テレサは、このような言葉を残しています。「親切で慈しみ深くありなさい。あなたに会った人が誰でも前よりももっと気持ちよく、明るくなって帰るようにしなさい。親切があなたの表情に、眼差しに、微笑みに温かく声をかける言葉に現れるように。子どもにも貧しい人にも、苦しんでいる孤独な人すべてに、いつでも喜びにあふれた笑顔を向けなさい。世話するだけでなく、あなたの心を与えなさい」(『あふれる愛』より)と。保育者が子どもに向き合う時の思いと通じるものがあります。「心をあたえる」とは、真心をもって自分を献げるといことです。

ベツレヘムの馬小屋で生まれたイエス様の生涯は、弱り果てた人、苦しみ悲しむ人々のために仕え生きた生涯でした。最後は、人類の罪を背負って十字架の苦難と死によってその生涯を終えられました。使徒パウロは「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなた方が豊かになるためである」(コリント第二 8章9節)とイエスの生涯と十字架の死の意味を語っています。イエス様の貧しさは、私たちが豊かになるためであったと言うのです。

どうか、このクリスマスに向けて、自分が得することばかり考えるのではなく、

イエス様の命によって私たちに愛が注がれたように、私たちも身近な隣人のために、遠く苦しみの中にある人々のために、祈りを捧げ、共に生きたいと思います。

(2019年12月10日礼拝奨励要旨)

「まなざしと出会う」

関田 良

ヨハネによる福音書 1章43節-51節

秋季キリスト教研修会の講演でお聞きした「承認欲求」をめぐるメッセージに、「認められたい」という強い欲求と「認められないかもしれない」という不安の狭間で揺れ動いている自らの姿を見つめ直す機会を与えられました。

承認不安の本質を解き明かした『認められたいの正体』(山竹伸二2011)では、承認を3つに分類しています。家族や恋人など身近な人からの「親和的承認」、学校の仲間や会社の同僚など、共通の目的意識や価値観、ルールが関わる「集団的承認」、社会や世間一般から得られる「一般的承認」です。多様な承認の性質の中でバランスをとるのは容易でなく、SNSなどで比較的容易に認められる機会に恵まれつつも、他者が承認されるとたちまち承認不安に陥り、承認されることにすぐに飢え乾く、とても不安定な日常を過ごしているといえます。では、決して涸れることのない承認の世界はあるのでしょうか？

保育所に預けていた長男は、延長保育の部屋の窓ガラスにおでこをくっつけて私が迎えに来るのをいつも待ちわびていました。ようやく歩けるようになったある日、迎えに行くと珍しくひとり黙々とままごとコーナーで遊んでいます。ちっともわたしに気づかないので、声をかけずに眺めていると、しばらくして我に返ったように振り向き、あっと驚いたあと、安心しきった表情でまたおもちゃのフライパンを揺らし始めました。

自分が捜して見出すよりも前に、すでに自分は捜され、眼をとめられていたことに気づいた子どもの驚きと安堵が連なった表情は、今日読んだ聖書の場面と重なるように思い出されます。

イエスと出会った最初の5人の弟子のうち、最もイエスのことを疑っていたのがナタナエルでした。しかし、イエスはナタナエルが自分のところに来る前に、すでに彼に眼をとめておられました。このことはナタナエルに大きな衝撃を与えます。自分がイエスのことを見る前に、イエスがすでに自分が何を思い、何を考え、何を求め、何に悩んでいるかに深く関心を寄せ、自分に眼をとめておられたからです。自分があち

こち捜しまわってやっと見つけたのでなく、ずっと前か捜され、先に見出され、自分に眼をとめていた、そのイエスのまなざしに出会ったのです。

そこには決して涸れることのない深い信頼に支えられた、永遠の承認の世界があります。神さまからの「いいね」は、順風満帆なときだけでなく、思い通りにいかない、どん底のときにこそ送られ、「認められたい・認められないかもしれない」という尽きない不安から私たちを解き放ち、信じる人も疑っている人も、どのような人も等しく無条件に受け入れられる喜びの中で生かされていくよう導いてくれるのでしょうか。

(2019年12月18日礼拝奨励要旨)

「扉を開く」

学長 棟方信彦

ルカによる福音書 11章9節-10節

「求めなさい。そうすれば、与えられる。」

年の始まりの特別な思いを「扉を開く」に込めています。今年はどうな年になるか、どんな年にしたいか？多くの方が抱負を新たにそれぞれの扉を開かんとしていると思います。

今年を代表するのは何と言ってもオリンピック・パラリンピックでしょう。56年ぶり2度目の東京オリンピックとなります。前回の東京オリンピックが、日本の高度経済成長の扉を開いたことは確かでしょう。新しいライフスタイルの地盤建設が始まりました。新幹線、都市高速、海外旅行などがこの時期に本格化、一般化したのです。

さて、抱負に戻って考える時、2つの異なる質問に思い至ります。「この年はあなたにとってどんな年になりますか？」と、「この年をあなたはどのような年にしたいですか？」との問いです。前者はやや受身的ですが、後者は少し能動的に感じます。この受止めの2面は、私たちの情報との出会い方にも繋がっています。能動的情報の受け止めは、検索エンジンが典型です。基本は質問者が、キーワードを指定し求める答えは明確です。しかし得られる情報は質問周辺に限定されがちです。他方スマートニュースなどは、求めもしない様々な情報が相手側から示されてきます。こちらは新しい情報との出会いの機会が多いのです。能動的な情報はプル型、受動的な情報はプッシュ型と言われています。プッシュ型の典型は、定まった目的がなくても、新聞や雑誌をめくっているときに会う情報です。予想していない情報に触れることとなります。プッシュ型の一つに書店の本棚を眺めることが挙げられます。思わぬ情報との出会いが起きます。有名な聖書の言葉に「求めよさらば与えられん」との言葉があります。この言葉を、人間が求めたものが常にそのまま答えとして与えられる訳ではないことと理

解することは大切です。問題は私たちが父なる神に求めるとき、常に端的なプル情報に出会うとは限らないことです。どんな答えが帰ってくるか、いつ答えが帰ってくるか不確かなプッシュが有り得るのです。

イエス様は言われます。父なる神は必ず愛を持って子である私たちに与えてくださることは間違いないと。神様はすでにメシア、それは当時の常識から度外れた姿で、想像を超える形で遣わして下さった。この事実を目を向けるべきなのです。究極の受動性、神様がどんな形でお答えになるかわからないけれども、約束は果たされてきたことを信じて、希望を保って生きることが進められているのです。このことは旧約の信仰の先輩たちの共通の体験でした。アブラハムは行き先を知らないまま故郷を旅立ち、モーセも多くは預言者たちも意に沿わない使命に無理やり召されています。このように神様は、人間の求めに対して、神様の自由を発揮してお答えになるのです。求めることは決して無駄にはならないのです。

(2020年1月7日礼拝奨励要旨)

「芽吹き」

厨子 直子

ローマの信徒への手紙 5章3節-4節

阪神淡路大震災25年メモリアルのハンドベルコンサートがこのチャペルで行われました。沢山の地域の方や同窓生の方がお越しになられて、心地よく響き渡るハンドベルの音色に耳を傾けながら、様々な思いで震災から25年の月日を感じておられました。大震災では6000人以上の方が犠牲になりましたが、新しく生まれてくる小さな命に携わる私たちの保育者としての使命や責任を新たにしました。

明後日は1月17日を迎えます。朝はヘリコプターのけたたましい音で目が覚め、帰宅時には暗闇に国道の黄色信号が異様に点滅するなど、尋常ではない当時のことを思い出すと気分が悪くなることもあります。今日は、毎年行われた1月17日の「震災のつどい」で子ども達に語ってきたメッセージを、現場に出られる皆さんにお話させていただこうと思います。

『12年前の1月17日阪神淡路大震災が起きた時、先生は他の幼稚園の先生でした。今日はその時のことを皆に聞いてもらおうと思います。先生は朝早くまだ真っ暗なころ、お家で大きな地震に合いました。ベッドで寝っているとドーンと大きな力で突き上げられたと同時に目が覚めました。こわくてすぐに電気をつけようとしたのですが電気はつきませんでした。真っ暗な部屋では、色々なものがひっくり返っているよう

で、恐る恐る家の中を見回りました。お家の人は怪我もなく無事だったので、明るくなってから先生をしていた幼稚園の様子を見に行きました。

家の周りは、ガスの臭いがしてとても怖かったです。遠くの空が赤く染まっていて火事が起きていました。道路に大きなひびが入っていたり、家が倒れて道がふさがれていたり、水道管が破裂して水が噴水のように噴き出しているところもありました。

なんとか幼稚園に行くと、横に開く重い重い鉄の門扉が奥に押し開けられていて、もうすでに園庭には近所の人がたくさんおられました。先生のいた幼稚園は避難所と言って、地震など災害が起こったとき、お家が壊れたり怖くて住めなかったりする人が泊まる場所に決まっていたんです。幼稚園の建物は強くて壊れてはいませんでした。ところが中に入ると、とんでもないことになっていたのです。遊戯室では、天井まであるガラス窓のガラスというガラスがすべて割れて、部屋中に飛び散っていました。ピアノは部屋の真ん中まで動き、職員室の重い大きな金庫までもが倒れていました。それくらい強い力だったのです。(中略・・・)』

そして幼稚園は1ヶ月ほど閉園だったことや日本中の沢山の人が手伝いに来て下さったこと、そして命の大切さや命を守ることなどについて話をしたあと、震災で犠牲になられた方のご冥福をお祈りして、保護者の方々と一緒に黙とうの時をもちました。

あの一瞬、大きなピアノが動き、ガラスが床に飛び散りました。よく遊ばせてもらっていた隣の図書館の庭園では、大きな石の灯籠が倒れていました。もし保育中だったなら、子どもたちの小さな命を守れたらと思うと怖くなります。ピアノは常に動かないように止め、積み木は60cm以上には積まないように片づけ、全ての棚には転倒を防ぐ金具をつけました。保育室の棚の上に置いていた花瓶や絵本はもちろん下ろしました。小さな備えを色々考えるようになりました。

やがて、2月13日に幼稚園が再開し、一部でしたが子ども達と会えたことを喜び合いました。生活発表会はなかったけれど、3月には多くの子ども達が戻ってきて卒園式もしました。卒業間際の庭では、子ども一人ひとりが植えたラッパスイセンが黄色い明るい花を次々と咲かせていました。春になると街路樹がいつものように緑の芽を吹き、新緑はひときわまばゆかったのを思い出します。植物の芽吹きに強さをわけてもらって、随分心が元気になりました。

辛かったあの日から一步一步前に進み、今があります。今日の聖書に「苦難をもほこりとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を 忍耐は練達を 練達は希望を生むということ。」とあります。どんな時も、希望をもって歩いていけますようにと願ってやみません。

(2020年1月15日礼拝奨励要旨)

「分かちあう心と人間の想像力について」 福田 豊子

ヨハネによる福音書6章9節-12節

皆さんおはようございます。新しい年を迎えこうして礼拝に参加させていただけること、本当に感謝しています。そして「今、ここ」で、皆さんと一緒にいることができる幸せ、共にすごすことができる幸せを実感しています。その幸せは「今という時間」、「ここという空間」を分かちあえる幸せです。

今日は「分かちあう=share シェアする」心について考えてみたいと思います。先ほど読んでもらった箇所は、パン5つと魚2匹で5千人が満腹したという内容で少ない食料を皆で分かちあったという事のたとえと捉えられます。

今から約200年前マルサスという人が、世界の人口は増え続けいずれ食料が不足すると予測しました。世界の人口は今75億人です。2000年ほど前は、2~4億人だったという推計があります。今から30年前の人口は約50億人だったといえます。50億人が75億人にこの30年間で1.5倍に増加したのです。人間の技術力は莫大に膨れ上がった人口を養っていただけの食糧を生産することができるようになりましたが、食糧も含めた生活資源の分配が不平等なので、世界には十分に食べられない人がたくさんいます。

ただ、遠くで飢餓に苦しむ人がいることを想像する機会があまりないので、今自分が食べているご馳走を遠くの知らない誰かと分かちあおうとはなかなか思えません。日本は食べ残しが非常に多い国でもあります。昨年11月の礼拝で神戸教会の高塚先生が、若い頃のネパールでのご経験をお話してくださいました。現地の青年が病気のおばあさんを背負い3日かけ病院まで連れて行ってくれた事に対しその理由を尋ねた時の答えが「共に生きるために」ということでした。「共に生きるために」は「分かちあう」必要があります。

さて昨年10月「分かちあう心」について松沢哲郎先生のご講演がありました。チンパンジーの子どもと一緒に生活する中で人間の心の研究をされてきた先生は人間の想像力が「分かちあう心」を発達させたと話されました。人間は想像力によって「今、ここ、私」だけでなく他の誰かの事に思いをはせながら生きることができる、「分かちあう心」は想像力の賜物だということです。私たちは、食料を含めた生活資源を「今、ここ、私」だけでなく、次世代や世界の貧しい国々の人々と分かちあうことができるでしょうか。

Think globally act locally「地球規模で考え身近なところから行動せよ」という言葉があります。Think globallyは「今、ここ、私」以外を想像する事、Act locally

は「今、ここ」で可能なことを実行する事です。2030年までに達成すべき、と国連が掲げたSDGs（持続可能な社会のための目標）まで10年。分かちあえば「喜びは倍になり悲しみは半分になる」でしょうか。

Share Shoei! Share the world! Share the earth!

(2020年1月22日礼拝奨励要旨)

「確かな土台の上に人生を築く」

森田 喜基

マタイによる福音書7章24節-27節

二人の人が、それぞれ家を建てました。どちらかの家が立派で、どちらかの家がみすばらしい、ということではなかったようです。二人の家は、外見としては、ほとんど同じだったのでしょうか。でも、一つだけ「大きな違い」がありました。それは、一人の人が「土台」がない家を建てたのに対し、もう一人の人は「岩の上」に家を建てた…ということです。やがて嵐がきました。土砂降りの強い雨が降り、強い風が吹き、ついに洪水となりました。土台がない家は、その嵐で倒れてしまいましたが、「岩の上」に建てられた家は、びくともしませんでした…。これはイエス・キリストの語られたたとえ話です。このたとえは何を語っているのでしょうか。それはあなたの人生を、何の上に築くのか、言い換えればどんな「人生観」、どんな「価値観」の上に築くのかということを問うているのです。

人はそれぞれ、その人なりに努力します。その人なりに頑張ります。でも、その「努力」や「頑張り」がすべて報われるわけではありません。失敗の連続ということもあります。そういった失敗や遠回りから私たちは学び、それが明日に繋がっていくのですが、その努力や頑張りが誰かの評価によって価値が変わるのであれば、またあなた自身の価値が誰かの評価によって変わるのであれば、それはとても不安定なものです。

イエスのたとえにでてくる「岩の上に家をたてた人」とは、神のゆるぎないあなたの評価の上に人生の歩んでいる人です。

旧約聖書イザヤ書43章4節「わたしの目にあなたは価高く、貴い。」とあります。私たちは命を与えられ、今ここに生きています。そしてその生きている存在は、神の目から見て高価で貴い存在なのです。私たちはどんな一人ひとりも神の賜物（プレゼント）を内に秘めた貴い存在なのです。これを私たちが受け止めた時、その安心感は如何ほどのもののでしょうか。その安心感に立つことができた時、私たちは本当に自分

を愛することができ、そしてその安心感に包まれて、本当に人を愛することが出来るのです。

そのような心の安らぎの上に、あなたの人生を築いていったら、嵐が来ようと、試練が訪れようと、しっかりと揺るがない、土台がしっかりした人生を送れることを聖書は教えています。

皆さん、沢山の希望と共に、不安もあるかもしれません。でも聖書はどんな時も神が共にいてくださることを語っています。確かな土台、神は愛してくださる、そのことに安心して、一人一人が与えられた課題に挑戦して行ってほしいと願います。頌栄で出会ったイエスの言葉に安心して、自らの未来を切り開いて行ってください。

2019年度 礼拝の記録

月	日	行事予定など	奨励者	備考	説教題
4	2		森田		目標を見すえて
	10		小寺	祈りについて	礼拝について
	16		関田	讃美歌について	賛美するために
	17		原		出会い
	23		尾島信之	継続礼拝 南大阪教会	大きな地震が起こった
	24		森田		すっきりとすこやかに
	30		榎方		神への献げ物
5	1		菅根		愛は造り上げる
	7	母の日特別礼拝	大仁田拓朗	東梅田教会	心を共に
	8		竹内		平和の道具について
	14		渡邊		感謝について
	15		藤本		すくいのことば
	21		厨子		支え合う
	22	春季研修会(保1)	森田	神戸教会にて	私の居場所
	28		尾島	継続礼拝	わたしは命のパンである
	29		専攻科1年生		専攻科キリスト教研修会報告
6	4		小寺		「大好き」がある場所
	5	花の日特別礼拝	藤浪	教団教師	思い悩みの、その先に
	11	ハトリコステ礼拝(通常)	ジュノン	非常勤講師	The Wind and Fire of God
	12		山中		物語をつくる
	18		榎方		賛美歌に学ぶⅠ
	19		榎方		賛美歌に学ぶⅡ
	25		上森	専攻科2年生	近づいてくださるイエスさま
	26		尾島	継続礼拝	生きにくさ
7	2		関田		わが身をとらえたまえ
	3		荒川 舞	ゲスト	愛の源
	9		原		すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結び
	10		沖中		知る力と見抜く力
	16		森田	継続礼拝	テストは、なんのためにあるのか？
	17		小寺		子どもたちの平和が守られますように
	23		尾島		明日、今日よりも好きになれる
	24		阿部	頌栄幼稚園園長	生きていくことはわかちあうこと
	30		菅根		優しい眼差し
	31		榎方		「休むとき」

月	日	行事予定など	奨励者	備考	説教題
9	6	始業礼拝	森田		時を知る
	24		棟方		平和のあいさつ
	25		原		希望を生む
10	1		森田		弱いときにこそ、強い
	2	継続礼拝	高塚純平	神戸教会	本当に大切なものは目に見えない
	8		小寺		受け入れる
	9		森本(保1)		学生災害ボランティア・ネットワーク事業報告
	15		渡邊		やさしさを溢れるように
	16		藤本		自然とともに
	22	創立記念礼拝	森田		こころ育てる使命
	23	顕栄月間礼拝	森田	幼稚園との合同	顕栄幼稚園との合同礼拝
	26	130周年記念礼拝	棟方		-
	29		平本	保2	恵みの神さま
	30	顕栄月間礼拝	荻田桃子	石井幼稚園教諭	神と子供とそれから私
11	5		布村		あるく
	6	収穫感謝礼拝	栗原宏介	岡本教会	What a wonderful world
	12		小寺		愛にできること
	13	継続礼拝	高塚純平	神戸教会	共に生きるために
	19		杉山		生還
	20		森瀬		歌は折り
	22	秋季キリスト教研修会礼拝	森田		-
	26		森田	保2	闇の中の希望
	27		原		見捨てない
12	3	社会事業奨励日	上内鏡子	神戸イエス団教会	一番大切なもの
	4		森田		神は共におられる
	10		菅根		主の益しさによって
	11	継続礼拝	高塚純平	神戸教会	心を備える
	17	クリスマス礼拝	杉田俊介	仁川教会	別の道を通して
	18		関田		眼差しと出会う
	20	クリスマスの夕べ	近藤誠	神戸多聞教会	-
	24	クリスマスイブ礼拝	森田		サンタクロースはいるんだ!
1	7		棟方		扉を開く
	14		床次陸志		なぜ泣いているのか
	15		厨子	神戸雲内教会	芽吹き
	21		阿部		子どもたちから学んだこと-「私はいつも子かつし組」-
	22		福田	顕栄幼稚園長	分かち合う心と人間の想像力
	28		森田		隣人を自分のように愛しなさい
	29	継続礼拝	高塚純平	神戸教会	壘かさの形
2	4	保・専後期授業終了	棟方		まかれた種
3	11	卒業礼拝	森田		見えないものが見えない世の中で

礼拝奨励集

頌栄のこころ 第30集

2020年3月13日 発行

頌栄短期大学 宗 教 部

礼 拝 奨 励 集

頌 栄 の こ こ ろ

～ 第 30 集 ～

頌栄短期大学